

## 江戸時代の長崎 ちよつと気になる話(二)

### 貰砂糖と盈砂糖

本馬 貞夫

「長崎が遠い」とは、甘さ(砂糖)が足りないことを意味します。九州のある町で「こん菓子はいーとばかし長崎の遠かたんね」といった具合で、この場合「長崎」は「砂糖」を表しています。長崎と砂糖の深い深い関係、その一端をご紹介します。

思いかえしてみれば私が小学校のころ、私の実家、本馬酒店がお届けする御中元・御歳暮は砂糖が多かったようです。五斤入り・一〇斤入りの箱を、主として飲食店や旅館などにお届けしました。概して甘口の長崎の料理には砂糖がたくさん入り用ですから、お得意さんも重宝だったと思います。ちなみに、一斤は一六〇匁、六〇〇g。

**砂糖の流通** まずは、北九州市立大学教授の八百啓介先生の諸論考を参考に、長崎貿易と砂糖の関係からみてまいりましょう。唐船・オランダ船のバラストには、重い砂糖袋(布製約六〇kg入り)・砂糖籠(藤製二〇三〇kg入り)が使われました。バラストに石(軽荷石)を使ったのでは商売になりません。唐蘭船が長崎を出港するときは、一〇〇斤入りの銅箱が船底に積まれました。荷揚げ後の砂糖は



石崎融思「唐館図絵巻」広馬場部分(長崎歴史文化博物館蔵)

新地や出島の蔵に入れられ、この後正規のルートでは大半が大坂の間屋を経て全国に流通します。とくに大消費地である江戸には樽廻船で運ばれました。砂糖の流通は正規ばかりではありません。密貿易とも違う大きな流れがありました。オランダ商館から長崎奉行や町年寄などへの贈り砂糖、さらに幕府高官への献上となるとその量は半端ではありませんでした。また、商館長・商館医など有力者や唐人屋敷の船主・有力唐商らから、馴染みの遊女への贈り砂糖(遊女側からすれば貰砂糖)もこ

こうした人足たちへの対策として、二つのことが打ち出されました。一つは、人足たちに筒袖の看板(「唐館図絵巻」の体にピタツとした小さな着物を見てください)を着せて、こぼしたり、捨つたりさせないよう

にしました。もう一つは「盈レ代リトシテ唐船一艘ヨリ砂糖七千五百斤宛差出サシメ、人足共ニ品渡シニ成、仲買之輩相止」させるということです。つまり、人足たちに砂糖・薬種をこぼすな、こぼさなくても唐船一艘あたり砂糖七千五百斤をやるから、というわけです。唐船一〇艘が入港したとして七万五千斤、換算して四五トンですから大変な量ですね。これを翌年大村町(現・万才町の一部)に設立された砂糖地売所で取り扱い、長崎市中に流通させました。

一方、困ったのは盈物仲買の者たちです。天明四年には八五人に倍増していたのですが、盈砂糖の取り扱いができなくなりしました。彼らは唐人屋敷で使い残された砂糖四万斤を買い受け、販売させてほしいという仲間連印の嘆願書を年番町年寄へ差し出そうと、愛宕山の麓に集まって話し合いました。これが奉行所に知れ、不束・不埒として、中心人物は「急度叱(かき)」「七日押込」、その他は「叱」の判決を受けました(「天明四年犯科帳」)。長崎市中の人々は、何らかのかたちで貿易の余得にあずかろうとしていたのです。

**道富文吉** 砂糖と言えば、私は商館長ドゥーフが一子丈吉のために用意した膨大な砂糖籠を思い浮かべます。これも貰砂糖の一種ですから、紹介させていただきます。ドゥーフは遊女瓜生野(新橋町箇所持町人の娘 土井よう)との間に丈吉をもうけました。やがて日本を去る日がくるドゥーフは、長崎奉行遠山左衛門尉に、丈吉の行く末を案じて長崎地役人への取り立てを嘆願しました。嘆願書は江戸へ送られ、これまでの一八年間に及ぶドゥーフの功績が評価され唐物目利(受用銀一貫目)に取り立てられることになりました。今後の生活費については用意された白砂糖三〇〇籠の売却代銀一三一貫目の六割を貸付運用し、長崎会所から年に銀四貫目が丈吉に渡される仕組みになっていました。今日のお金で数百万円にはなりませんから十分だったでしょう。一七才で亡くなった道富丈吉の墓は厩台寺後山にあります。(県長崎学アドバイザ)

(参考文献) 八百啓介「近世長崎における輸入砂糖とその流通」(「和菓子NO9」)  
八百啓介「砂糖の通った道」(「菖書房」)

れまた莫大でした。多いときは全体で年間数百トンに及ぶ、これらの砂糖は転売を前提とした贈り物です。

遊女の貰砂糖は長崎会所を通して販売され、代銀の多くは遊女のものになったと思われれます。砂糖だけでなく、鼈甲の櫛や高級織物、その他珍しい品々が遊女に贈られていますから、これらは遊女を飾っただけでなく、おそらく転売もされたでしょう。遊女(娘)に依存する親・兄弟、はたまた遊女に関係するよからぬ男たちの存在も想像できます。三〇年ほど前に、当時長崎大学におられた加藤章先生が言われたことを思い出しています。先生は社会科研究室内の学生さんたちと「桶屋町宗旨改踏絵帳」二〇九冊を精査され、あまりの遊女奉公の多さに驚かされていました。先生が言われるには、表現は適切でないかもしれないが、行儀見習いのような感じで(気軽に)遊女奉公に出された女性がいたのかもしれない、と。

**盈砂糖** さて、貰砂糖と並んで長崎市中に流通したのは盈砂糖です。唐蘭船からの荷揚げ、蔵入れ、荷渡し作業に際して、こぼれ出た砂糖や薬種類は「盈物」と呼ばれ、作業する日雇人足たちのものになっていました。自分たちのものになるとなれば、持ち運びの節に落ちこぼれたのではなく、ワザと荷をひっくり返す輩がだんだん多くなります。

「続長崎実録大成」によれば、安永三年(一七七四)には三三人の盈物仲買(主として砂糖)が定められる程の流通量になり、翌年には九人増えて四二人になりました。一〇年後の天明四年(一七八四)、唐船に関する荷役作業の実態をみれば「日雇人足共取扱ヒ宜シカラズ、薬種砂糖之類夥シク盈捨リ、人足共拾ヒ取シ分ハ、仲買相立テ売捌キ来ルノ処、盈高次第二相増」というように盈物が激増している状況です。掲載写真は、人足が甕を落として何かをこぼし、日・中の監視役から怒られているところですが(石崎融思「唐館図絵巻」)、これは砂糖でないかもしれません。

### 風信

〇十二月になりました。十二月は別名で師走とよんでいます但其の意味は「普段は静かな先生方でも十二月になると走り廻らねばならぬ程いそがしくなるのでシラス」と言うのだそうですが、本当でしょうかとお尋ねがあった。

本会でも新年の行事の準備で毎日バタバタと過しています。〇十二月一日より純心学園創立八十周年記念事業として美術展を開催するの

で、其の準備会に参加して下さいとの事。純心学園博物館には「清島省三コレクション」(元十八銀行頭取)寄贈の事もあり、参加。美術展の会場・長崎県美術館県民ギャラリー(出島町)。会期・一日より十三日まで。(入場無料)

〇長崎会津会より、「長崎と会津をつなぐ絆」話を中心に十二月五日(土)午前一〇時より長崎歴史文化博物館ホールにて開催するので多数ご参加くださいとの事。(無料)長崎における会津の人と言え、孫文を援助し「東洋日の出新聞」を創刊した鈴木天眼、柔道家で鼠島海水浴場創立に協力した西郷四郎。明治時代の県知事日下義雄を思いだす。

〇長崎の十二月の行事として、寛政九年(一七九七)長崎の人・野口文龍が著した「長崎歳時記」には正月の準備として「手かけの台の用意に始り、晦日(三十日)には家々・翌朝の雑煮の具をこしらえ重肴・屋蘇酒等を用意する。雑煮は水菜・するめ・大根・牛蒡・こんぶ・南京黒芋の六品を見合せ串にぬき置き、だしを煮て餅を入れ出す時、串をとりのけて中に加う。以前は干鮑・煎海鼠をぬき添るを古式とす。」

〇出島オランダ屋敷では毎年、冬至後七日に「オランダ冬至」(正月)の行事があり出島関係役人も招待され、其の料理内容は「長崎名勝図絵」に詳しく記してある。

〇今月、御寄贈いただいた書籍

一、長崎文献社より『長崎の陶磁器』。三河内・波佐見焼を中心にした論考と第三章では「長崎文化と陶芸」の研究発表あり。共に大いに参考となった。

(長崎県立大学委員会刊)一、八〇〇円(税別)  
一、『秘撮』著者大隈孝一氏より寄贈。St.Helena島を訪ね、ナポレオン関係・天正使節上陸遺跡等を中心に多くの写真を交えた珍らしい資料を拝見でき

た。(東京・オフィス限定発行・一、八〇〇円+税)

皆様、よき新年をお迎え下さいませ。事務局一同

長崎歴史文化協会研究室

TEL八二二一五四〇  
十八銀行公会堂前出張所2F

